

ぎ、旗を巻いて降参し、揉み手して命乞いをする敗将の姿、と取り成したのに
対して、九五八は逆に、命よりも名は末代、と、降伏よりは自刃を選んだ武
将の最期の様子、と取り成す。さらに九五九は、名を末代まで残すはこの
とき、と、有明月の傾くまで、夜もすがら発句を工夫し思案している俳人の姿
とする。談林派は京都・大阪・江戸の三都で栄えたので、九六十は前句の発
句帳を受け、三都の宗匠たちが秋風の吹く有明月の夜、寝もやらず句作に精を
出す様を詠んでいることになり、新興談林派の意気込みさえ感じられるよう
である。

(未完)

元禄期まで待たなければならなかったのである。(乾裕幸、岩波書店「新日本古典文学大系」『初期俳諧集』「解説」による。)

談林派とは、もと江戸の無名の俳諧結社の名で、仏教寺院で僧徒の学場を談林(梅檀林)と称したのになぞらえた命名であった。それが宗因一派の呼称となったのは或る偶然によるもので、延宝三年夏東下して奥州磐城平藩江戸藩邸に滞在していた宗因は、かつて来坂して師礼をとったことのある俳人に請われ、同派の連歌の興行に巻頭の発句「さればここに談林の木あり梅の花」を与えた。その『談林十百韻』が、やがて「西は長崎、東は仙台を限りて、是道の好士耳を洗はぬと云事なし」(『解脱抄』)と自賛するほど世に行われるようになり、その結果、いつしか宗因流を談林派と称するようになったのである。

談林派は「飛躰」(とびて)とも呼ばれるように、それまでの付合の常識を破り、貞門(古風)とも呼ばれた)にはない大胆な発想の転換を特徴とした。以下、岩波書店「新日本古典文学大系」『初期俳諧集』によって、それを見ていくことにしたい。

『談林十百韻』第一巻に宗因が与えた発句は、

されば爰に談林の木あり梅の花

西山氏
梅翁

で、「談林」は「梅檀林」。「梅檀」は香木の一種「白檀」(びくたん)。もと、仏教寺院で僧の学問所に梅檀林を設けたところから学問所そのものを表わし、また僧の集まる場所を表わすようになった。句の「談林の木」は「梅の木」を「梅檀木」になぞらえて、会衆に挨拶としたもの。「梅の花」は、京から太宰府まで飛んだという天神の飛梅伝説から「飛躰」と呼ばれる談林風の木に擬したもので、梅翁(宗因の俳号)自賛の意はないという。談林↓飛躰↓飛梅↓梅の木という連想、などの注がある。脇は、

世俗眼をさますうぐひす

雪柴

で、「いで聴衆の眠覚まさん」(謡曲・自然居士)、「梅が枝に来るる鶯春かけて…時守の眠覚むる難波の」(謡曲・難波)などを踏まえて、「鶯の声に世間の人びとが眠りを覚ます」という裏には、宗因の挨拶に込めて、「その新風が世間俗俳の迷妄を破る」との意を寓した、という注がある。和歌の伝統を重んずる貞門の俳風に対し、謡曲や漢詩を踏まえた詠みぶりは、談林派の得意とする新風であった。ただし、本稿の主題「ことば遊び」という点では、特に注目すべきものはない。第六句、第七句、

追手にちかきかけはしの月

志計

小男鹿や薬人形におそるらん

一朝

では、前句「城廓の追手門に近い谷の棧道に月がかかり、いましも軍兵の行列が渡ってゆく」という情景に、『太平記』「七・千劍破軍事」によって「城の追手門近く敵を欺くために立てた薬人形に、小男鹿が恐れをなして逃げ出すだろ」と付けたもの。これも貞門にはない斬新な付合であるが、「ことば遊び」という点では、前の例と同じである。

次に、本題の「ことば遊び」に注目して第一巻を見ていくと、

一七 勘当や夢もむすばぬ袖枕

松白

一八 つよくいさめし分別の月

卜尺

一九 お盃存じの外露しぐれ

松意

二十 ふらる、うらみ山の端の色

雪柴

では、一七で「賽子賭博に打ち込んで勘当されたら息子」が「袖を枕の侘寝は苦しくて夢も結ばない」と嘆くのに付けて、一八が「月」の定座であるところから、「月」に「尽き」を掛けて、「強く意見もし、さんざん分別もしたが、その分別もとうとう尽き(月)果てて」の勘当であったとする。その「いさめ」を「主君への諫言」と取り成し、「思いがけず盃を頂戴して喜びの涙にかきくれる」としたのが一九。「露しぐれ」は前句の「月」に合わせた「あしらい」で、「時雨のごとく降る露」に「涙」の意を効かせる。二十では、「露時雨漏らぬ三笠の山の端も秋の紅葉の色はみえけり」(『統古今和歌集』)などにより「露しぐれ」に「山の端の色」をあしらい、「ふらる、」に「降らる、」と「振らる、」を掛けて、表に「時雨に降られて山の端の紅葉が色づく」と言い、裏に「女に振られた恨みが顔色に表れる」ことを匂わせた。「お盃」は「縁切り」の盃、「露しぐれ」は恨みの涙であろう、などの注がある。

もう一つ、『談林十百韻』の最後、第十巻から拾ってみよう。

九五六 蠅にならひて君に手をする

正友

九五七 はげあたま甲をぬいで旗を巻

卜尺

九五八 名は末代の分別どころ

一朝

九五九 有明の月の夜すがら発句帳

志計

九六十 京都大坂江戸の秋風

在色

では、九五六の蠅のように手をすって媚びへつらう様を、九五七では甲を脱

うに申年が過ぎて酉年が来た、というのである。

しめ縄や春をもく、る戌の年

重頼

「戌年」と「犬」、「注連縄」と「犬をくぐる」縄を掛けた。「縄」・「くぐる」・「犬」は縁語でもある。

霞さへまだらにたつやとらの年

貞徳

「寅年」と「虎」を掛け、「虎」・「まだら」は縁語。霞まで虎の毛並みのように「まだら」に立ったという見立ては、今の感覚ではむしろ平凡に過ぎようか。

次に、太陰曆では年毎の日付と季節のずれが大きく、時々閏月を設けて十三カ月の年を作ったり、立春が前年の内に来ることも珍しくなかった。『古今和歌集』冒頭の「年のうちに春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ」（在原元方）はよく知られているが、『犬子集』の発句にも同様のものが見られる。

今朝の春は鸚鵡返しかとり年

正章

「鸚鵡返し」は言うまでもなく「人の言葉をそのまま言い返す」こと。年内立春と新年と同じことを二度繰り返すからそのように言い、それを「酉の年」に引っかけた。

あら玉子かへりて立やとりの年

慶友

「あらたま（の）」は「年」にかかる枕詞で「玉子（卵）」と掛け、「擣りて」と「返りて（再び）」も懸詞。「玉子」・「擣り」・「とり」は縁語。酉年だけに、卵が擣るように「かへりて（二度も）」春が来た、というのである。

やはり年頭の発句で、

宗恕

年も人もそだつはじめはむ月哉
は、「睦月」に「襦袢」をおむつ」を掛け、一年の初めは「睦月」で、人の一生の初めも「襦袢」だと洒落た。

老て今朝たび児のむ月かな

貞継

同じ趣向で、「老いてふたたびちこになる」という諺を踏まえたもの。人の一生は襦袢に始まり襦袢にかえるが、一年も睦月に始まり睦月にかえる。

さらに、趣の違うのを少し拾ってみると、

重頼

三方につみしをいかに西ぎかな
「三方」は「三宝」。「西ぎかな」は「螺肴」で新年の祝儀に用いる肴。「三方

に載せたものを、どうして一方だけを意味する西ぎかなと言うのか」というわけで、いわゆる「無理問答」である。

「或人云、菜を七ツ置て七種の発句せよとありければ」という題の

たくさんなはな草のなづなかな

重頼

なつななかなになまめくわかなかな

春可

は、説明の必要もあるまい。

鶯のほう法花経や朝づとめ

玄利

は、鶯の鳴声に法華経をかけて、朝鶯の鳴くのを僧侶の朝のお勤め（仏前の読経）に見立てた。鶯はその鳴き声から「経読鳥」の別名を持つと言われている。

鶯の初音や経の一の巻

松一

が、鶯の初音を法華経第一巻に見立てたものであることは、言うまでもない。

鶯が憂世いとはば梅ほうし

長吉

は、「梅干」↓「梅法師」で、朝夕経を読む鶯が出家すれば、大好きな梅に囚んだ梅法師になるだろう、というところか。

十三

早くから地下歌壇の第一人者として声望のあった松永貞徳は、やがて重頼・親重ら他門の人々をも傘下に収めて全俳壇の覇者となって行ったが、俳諧連歌はあくまでも純正連歌への階梯という考えを捨て切れずにいたため、和歌美学によって俳諧文学を律するという保守主義へ向かわざるを得ず、俳諧性の衰弱を招いて拡大する俳諧人口の要請に適切に応えることができなくなっていった。

一方、貞徳が中央俳壇（京都）の覇権を握るとともに、阻害された他派は新たな勢力圏を大坂・堺などの新興地に求め、その中から、大坂天満宮連歌所の宗匠西山宗因を中心とする談林派が、反貞門の新興勢力として登場した。もともと、宗因には一門を組織してその長に就こうという野心がなく、談林派という呼称も反貞門の新風を奉ずる人々を広く指したに過ぎなかったようである。多くは摂津・河内・和泉の町人階層に属し、貞門はもとより、重頼門も含めてあらゆる師承系列や流派を超えて自由に俳諧を試みようとしたから、談林派が全俳壇を席巻していく過程では、それまでのすべての師承系列に基づく流派がそのあおりを受けて、一度は解体されざるを得なかったという。その再編成は

脇句は、

月ハおぼろに深るいのし、
で、「いのしし」は「るのしし」が正しく、「深るゐ(亥の刻) ↓るのしし」と掛けた。

「月はおぼろに照らして花の匂いをただよわせ、夜もようやく更けた。たぶん亥の刻だろう」の意であるが、「匂いなら花よりも鼻だ」という発句をうけ、「花↓おぼる月」「鼻↓るのしし(猪)」と茶化していることになる。

第三句、

春の夜の夢やさながらうしならん

では、「憂し」に「丑」を掛け、「亥の刻」からさらに更けて「丑の刻」となる。そして、「春の夜の夢」は古来艶なるものとされて来た(例えば、藤原定家「春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空」『新古今和歌集』巻第一、など)が、それを「すべて(さながら)心憂いものだ」とそっくり引っ繰り返したところに「俳諧」があるという。

以上、ほんの一部を見ただけであるが、守武は「俳諧だからといって、放埒無慚、むやみに笑わせようとはかりするのはどうか」という考え方だったようで、その点で山崎宗鑑(『犬筑波集』)などで行き方を必ずしも同じくしていたわけではない。けれども、そこまで踏み込むのは本稿の埒外ということになるであろう。

十二

宗鑑、守武の後およそ百年の間は、打ち続く戦乱のために俳諧の道はほとんど絶えたかに見えた。その俳諧が息を吹き返すのは、徳川の治世がようやく安定した寛永年間に入ってからであった。

江戸幕府は京都の「御歌始」に対抗して年頭の「御連歌始」を恒例としたが、その宗匠として第一の連衆をつとめた里村家は、連歌の余興として俳諧の座をも営んだ。江戸初期俳壇の中枢を占める人材の多くが里村門下から出たのはそのためであった。里村家は初代昌休の没後南家(実子昌叱の子孫)と北家(門人紹巴の子孫)に分かれたが、北家の流れを汲む松永貞徳はやがて江戸初期俳壇を代表する貞門の総帥となり、南家の流れを汲む松江重頼や傍系の猪苗代家

から出た野々口親重(立圃)らがこれに対抗した。

いまこの三者について詳述する余裕はないが、当初重頼・親重共編貞徳監修という形で着手された『犬子集』が結局重頼の単独編集(寛永十・一六三三年刊)となったのは、その関係の複雑さを物語るものと言ってよからう。この史上初の俳諧類題句集『犬子集』の誕生は、俳諧の大衆化(俳諧作者の階層的拡大と地方への普及)、その中で職業的俳諧師(業俳)の誕生、と無関係ではなかった。結局は、俳壇の支配権を誰が握るかという問題で、それは、その門下俳諧師の生活にも繋がっていたからである。貞徳およびその門人たちと重頼・親重のあいだには、その後も紛争が絶えなかったと言われている。

それはさておき、本題に返って『犬子集』から江戸初期俳諧に現れた「ことば遊び」の実態を探ってみることにしよう。

岩波書店「新日本古典文学大系」『初期俳諧集』(森川昭、加藤定彦、乾裕幸校注)によれば、総句数二六七の内、巻第一から巻第六までが「発句集」で、総数の六〇パーセントに当たる一五四二句が、四季それぞれの題名によって分類される「類題句集」の形をとっている。巻第七から巻第十七までは「付句集」で、一五二八句を春、夏、秋、冬、恋、神祇、釈教、雑、魚鳥などに分けて並べ、その後に、巻を立てずに「上古俳諧」一一九句と「近年之間書」八句が、付録のような形で付けられている。

形式から見ても句数から見ても、編集の主眼が「発句」にあることは明らかで、もともと連歌から出発した俳諧が、この頃すでに発句中心の傾向を強めていたことを窺わせるように思われる。

さて、同音異義語による言葉の洒落は、言う側も聞く側も分かりやすく使いやすいためか、和歌や連歌の修辞(懸詞)として多用されるだけでなく、日常会話の中などで今でも普通に使われるが、『犬子集』の発句で最も多用されているのもこれである。一々挙げていけば切りはないので、巻第一(春上)から幾つか拾ってみよう。

まず、年頭の句では干支に掛けた洒落が目立つ。

去年よりもまさる日出度今年哉 慶友

は、言うまでもなく「申年」と「まさる」を掛けたもの。

申がへり見てや立来るとりの年 真利

「申がへり」は「猿返」で曲芸の一種。猿返りを見物していた人が立ち去るよ

して神職や郷民が干戈を執って争い、衰微最も甚だしかったころである。守武自筆の跋文によれば、この「古来まれなるどくぎん」は神意をうかがう「鬮」をとって立願された。何のための立願であったかは跋文に記されていないが、飯田正一は「独吟千句」そのものがそれであったと推測している。伊勢内宮の神官が天照大神ではなく天神に奉納したというのもいささか腑に落ちぬ気がするが、発願の正月二十五日は天神ゆかりの日で、それに因んで「連歌の神としての天神」に奉納した「法楽誹諧」であろう、と説明されている。時に天文五年、守武六十八歳。当時としてはかなりの高齢であった。型通り百韻十巻を連ねて千句とし、五十韻一巻を追加して、最後に「跋」を付す。跋文では五昼夜で完成したと記されているが、その後かなりの手が加えられた形跡があり、成稿までにはさらに数年を要したと見られている。また、第一巻は「第一」とあるのだが、第二巻以下はそれぞれ「獺何 第二」（「獺」は「猫」の誤りか）「何毛 第三」のように「賦物」（「賦物」については、前稿参照）になっている。以下、飯田正一編『守武千句注』から幾つか拾い出してみよう。

「第一」の発句

飛梅やかろくしくも神の春

が、いわゆる「飛梅伝説」を踏まえた句であることは説明するまでもない。天神に供える「奉楽俳諧」の巻頭の句としてふさわしいばかりでなく、古来文学の神として尊崇された道真に俳諧の文運を祈る意も込めて飛梅をもって来た、という説明も納得出来る。「軽々しく」は今風の「軽率」ではなく、神徳によって軽やかに空を飛ぶ梅の様と見るのがよいのではなからうか。

これに付けた脇句は、

われもくゝのからすうぐひす

であるが、「飛」から「鳶」を引き出し、「梅」から「うぐひす」を引き出す。鴉や鳶までわれもわれもと浮かれ出てきたというのであるが、これも、飛梅にあやかっ「作者自身も含めて同じく神徳をたたえているのであろう」と注されている。

第三句は、

のどかなる風ふくろうに山見えて

で、われもわれもと鴉や鳶が飛んでいるのどかな春風の吹いている楼上からは、遠くに山も眺められる、というのであるが、「風吹く楼」に「梟（ふくろふ）」

を掛ける。前句「からす」から仲の悪い「ふくろう」を引き出し、「昼は目が見えないはずの梟に山が見えたと隠したところに俳諧がある」と注があり、その典拠として「鴟鵂夜撮蚤察毫末、昼出瞋目而不見岳山、言殊性」（莊子・秋水一七）を挙げる。なお、「山見えて」は「山見えで」がよいか、との注もあり、そうなれば当然意味は変わってくる。

次に、「獺何 第二」の発句は、

青柳のまゆかくきしのひたいかな

で、「獺（猫）何（下賦）」は「猫額」である。「きしのひたい」は川岸の突き出たところを人の額になぞらえ、「青柳の眉」は女性の細い眉を青柳に見立てたもの。青柳が岸の突先に青みがかって垂れている様を「額に眉を描いているようだ」と見たのである。なお、「ひたい」は歴史的仮名遣いでは「ひたひ」が正しく、「眉」と「額」は縁語。

脇句は、

こほりうちとけよするたしなみ

「たしなみ」は「身だしなみ」で「岸に」寄する波」と掛け、「春になって水がとけ、岸に打ち寄せる波も春の装い（たしなみ）をしている」と、前句の「眉描く」を春を迎える「身だしなみ」と見てこれに応じていることになる。

第三句は、

水とりのけさせちごとにかびきて

で、前句「寄する波」から「水鳥」を、同じく「たしなみ（用意）」から「せちごと」を引き出す。「せちごと」は「節の食事」で、節日（祝日）に親戚故旧を招いて酒食を供すること、ここでは「けさせちごと」で「元日のそれとしたのであろう」と注があり、前句を受けて「元日の朝水も解けて水鳥が節事に招かれ、身嗜みをして浮んできた、というのであろう」と説明されている。

「何毛 第三」は、

花よりも鼻にありけるにほひ哉

を発句とする。「何毛（上賦）」は「鼻」と結んで「鼻毛」となる。「花の匂いは花にあるのではなく、それを嗅ぐ鼻にあったのだ」の意で、「花」と「鼻」と、同音異義語による洒落であることは言うまでもない。「伝統的美意識を否定し、花を卑俗な世界に持ち込んで、ひとひねり捻った」ところが「俳諧」だという。

夕顔の花はふくべの手向けかな

『竹馬狂吟集』にも採られている発句。夕顔と瓢箪の異同については諸説あるがここでは同一と考える。夕顔の夷（ふくべ瓢箪）は切られて花生けになるから、それに生けられた花は自分で自分に手向けしているようなものだ、という趣向。

姫松の下葉や露のそめぶぐり

祝言の夜、新郎新婦床入りに退出後の座興の句か。姫松は新婦を指し、その下葉も隠喩。「露のそめぶぐり」という造語を手柄とした句、などの注が付けられている。

一つの句に幾つもの句を付けて優秀を競う遊びは、祭礼の際などに一種の賭け事として興業され、俳諧連歌でも「付合」の練習として重宝されたようである。『大筑波集』にもその形を残して引かれているものが見られる。

すきの衆東の旅におもむきて

① たづぬやすり茶壺のいしぶみ

② 越ゆるやなたのさやの中山

③ 掘りこぼさんもいさや富士のね

①は、注によれば「すき」を茶の湯の「数寄」として「すり茶抹茶」を、「抹茶」から「茶壺」↓「壺の碑」を引き出した。「壺の碑」は「東」に対する取り合わせで、青森県上北郡にあった古碑、或いは宮城県多賀城の碑。後世両者混同されるようになったが、西行法師の歌にも詠まれ、風流人の関心事でもあった。

②は、「すき」を「鋤」と見立てて「鉈」を出し、また「すき」を「歌好き」歌人」として、「鉈の鞘」から西行法師の歌で知られた「さやの中山」を出した。

③は、「すきの衆」を「鋤の衆」と取り、鋤を携えた大勢の者が東国へ行って富士山を掘り壊すのか、と大袈裟に言いなした面白さ。

この他、痘瘡（天然痘）の平癒祈願のために催した俳諧連歌の最初の五句は、

梅やいつ痘がさ疼く宿の春

消ゆればなほ雪のむら竹

うぐひすはおのが座敷に音を鳴きて

たが遅参をか猶よぶこどり

見たせば山中殿もあられけり

注によれば、発句は、梅の花が開くのを待つ心に「痘」の「瘡」が「疼く」治る」のを待ち兼ねる心を重ねたもので、「青柳を片糸によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」（『古今和歌集』巻第二十）から「梅の花笠」↓「痘の瘡」を、「（花が）開く」↓「瘡が）疼く」を引き出した。「笠（傘）」と「開く」は縁語。

脇句は、雪が消えれば丘し撓められていたむら竹が元にもどるように、瘡の病も間もなく治りますよ、と付けたもので、「直る」に「治る」を掛け、折袴の意味をこめた。

第三句は、前句の「竹」に「鶯」を付け、「なほる」に「座敷」を引き出して、「鶯が自分の座敷で盛んに鳴いている」と詠んだ。

第四句は、その鶯の鳴き声を「遅参の客」を呼んでいると取り成して、「鶯」ではなく「呼び鳥」までが呼んでいる、とつけた。「猶呼ぶ」に「猶呼び鳥（呼び鳥まで）」が掛けていることは言うまでもない。

第五句は「遠近のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼び鳥かな」（『古今和歌集』巻第一）に拠ったもので、「猶呼ぶ」を受けて「山中殿も……」と「全部揃っている」のに「いったい誰を呼んでいるのか」と不審の態を示した。

十一

宗鑑と同じころ『俳諧之連歌独吟千句』（通称『守武千句』）を編んだ伊勢内宮の神官荒木田守武は、宗鑑と共に俳諧の鼻祖と目されている。

飯田正一編『守武千句注』（古川書房）によれば、守武は外祖父や父・兄などの影響で早くから連歌に親しみ、宗鑑をはじめ当代のすぐれた連歌師の多くに指導を乞うたりもしたが、連歌師としては凡庸な二流作者に過ぎなかったようである。その守武の名を文学史上に留めたのは、外ならぬこの『守武千句』であった。

「千句」は連歌形式の一つで「百韻」十巻からなり、興業は三日にわたって行われるのを常とし、初日三百韻・中日四百韻・三日目三百韻（追加一巻）が詠まれたという。守武はそのすべてを、独力（独吟）で五昼夜で完成したというのである。時代の混乱は神の世界にまで及び、伊勢神宮でも内外両宮が対立

ておれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にかたるな」とあり、同「仮名序」には「さが野にて、むまよりおちてよめる」と詞書を付けてこの歌が引かれている。高い所から落ちて息をはずませている様を、女郎花を手折りそこねて落馬した遍照の姿として付けた。取り澄ましていた地位の高い和尚が落馬して息を弾ませている滑稽さを狙ったのであろう。

集中には宗祇や、宗祇と共に『新撰菟玖波集』を撰した兼載の作とされるものもあって、「純正連歌」の作者が気散じに「俳諧連歌」を作っていた様子が窺われ、『新古今和歌集』の歌人が、新風確立のために日々研鑽を重ねる一方で、時には「連歌」を作って遊んでいたという当時の有り様と、これはちょうど重なっているようにも見える。

十

『竹馬狂吟集』に続く第二の俳諧撰集は『誹諧連歌抄』(一五三九年までに成立)で、通称『犬筑波集』。「犬」は「劣ったもの、まがいもの」を意味し、「筑波」は「菟玖波」であるから、「純正連歌」に対して一歩退いた姿勢と見られるが、却って居直った命名と取れなくもない。撰者は山崎宗鑑とされるが、宗鑑の伝記には不明な点が多く、「山崎」というのも、晩年に京都郊外の山崎に隠棲していたという過ぎないようである。『竹馬狂吟集』と重なる句も少なからずあり、手法的にも類似点が多いが、より一層庶民的で、素朴で奔放な滑稽さがあるとも評されている。前者で見たのとは趣の異なるものを中心に、同じく「新潮日本古典集成」『竹馬狂吟集 新撰犬筑波集』によって紹介してみよう。

霞の衣すそはぬれけり

左保姫の春立ちながら尿をして

巻頭の句としてよく知られている。前句はこのままでは意味が通りにくいのが、付句は「霞の衣」に春の神「左保姫」を、「裾が濡れる」に「立小便」を対応させ、女神の立小便という意外さで卑俗な滑稽味を出した。「春立つ(立春)」と「立ちながら」を掛けたことは言うまでもない。近世初頭の俳諧師松永貞徳がこの付句を嫌って、

①天人やあまくだるらし春の海

②大ぶくを座敷のうちへやこぼすらし

③春立てふむ雪汁やあがるらん

の三句を代案として示した(『新增犬筑波集』)ことが知られている。細川幽斎に和歌・和学を学び、里村紹巴に連歌を学んだ正統派の貞徳からすれば、卑俗な「笑い」を狙うだけの付け方が流行する風潮が苦々しく思われたのであろう。なお、「大ぶく」は「大服茶」で、元来は茶を多量に点てることを言ったが、大服が大福に通じることから、祝儀茶として新年などに飲まれるようになったものである。

連歌は(初期の短連歌を除けば)百韻・五十韻が基本の形で、『菟玖波集』以下の連歌集はそういう「長連歌」から優れた「付句」を部分的に抜き出した「アンソロジー」であり、俳諧連歌集もその例外ではなかった。

また、連歌集では「発句」を独立して扱うことが少なくなかったが、『竹馬狂吟集』でも計二十の発句が春夏秋冬に分けて巻頭に置かれ、『犬筑波集』では九十四の発句が四季の進行に従って巻末に纏められている。その中から目立つものを幾つか拾ってみよう。

陣衆みないぬの日めでたけふの春

兵を率いて入京しようとした某が元日枚方に敗走した時の句、という注がある。兵が「去ぬ」に「戌」を掛け、合戦沙汰の終わった日が丁度「戌の日」だったというわけで、そのめでたさを新年のめでたさと共に祝った。発句の冒頭に置かれ、宗鑑が戦国時代の真っ只中に生きた人だったことを思い起こさせる句である。

春もしれ松こそふぐり落としなれ

注によれば、節分の夜厄年(四十二歳)の男が氏神等に参拝してこっそり禪を落としてくるという「厄よけ」の風習があり、これを「ふぐり落とし」と言った。春になって松笠が落ちるのを「松のふぐり落とし」と見立てて、新春の縁としてめでたい松を出した。詞書に「祈禱に」とあるところから「短冊に書いて神前に供えたものか」と付記してある。

月に柄をさしたらばよきうちはかな

宗鑑の代表的な発句として知られる。「月」は秋の季語であるが、これは「うち」が効いて夏の句となる。余り暑いので何か好いものはないかと見まわし、「それぞれちょうどよい、あれに柄をつけよう」という次第。

「ささら」はそのころ田楽などで使われた楽器。「摺りささら」と「びんざさら」の二種があり、ここは前者で、細く割った竹を束ねて刻み目のある細い棒と摺り合わせて音を出したものだ。「成り」には「鳴り」を掛け、割れた笛は吹いても鳴らないし、ささらとして「摺る」わけにもいかない、というのだが、頭注によれば「吹く」「摺る」には「垢を掻き取る」の意味もあり、『大筑波集』一本に「有時宗祇宗長牡丹花三人風呂へ入りけるにたちすぎければ」と詞書があつて、この句が出ているという。

「見立て」や「とりなし」も常用の手法で、前出（「上は濡れたり…」）の他に、

なでしこをかたにのせたる岩ほかな

ちりけよりなほあつき夏の日

大きな岩の上に咲く可憐な撫子を親が子を肩にのせた姿に見立てたのが前句。「ちりけ」は灸の「ツボ」の一つ「ぼんのくぼ」で、岩上に咲く撫子の赤い花を「ちりけ」に据えた「灸」に見立てた。「ちりけ」に据えた灸は最も熱いといわれている。

山と都を渡る夕立

さしかざす銚をならぶる祇園の会

「山」は「比叡山」。比叡山から都にかけて夕立が降り渡っているという前句の情景を受け、山を祇園祭の「山車」に見立て、夕立の「たち（太刀）」から同じく「銚」を引き出し、夕方に立ち（夕立）出でて山車と一緒に銚が都大路を渡っている、と付けた。

つぶやき事はあそここにも

念珠の緒をいろりのはたにもみきりて

つぶつぶつぶやく言葉（つぶやき事）を「粒」を「焼く」にとりなし、念珠（数珠）を激しく揉んで緒を揉み切ったのがいろり端だったため、数珠玉（粒）が飛び散ってあちこちでもこっちで焼けている、というのである。こじつけに過ぎて前の二例に比べて一段見劣りがする。

世俗の文芸に猥雑の要素は欠かせないが、露骨に過ぎるものは文芸としても一段劣るので、やや「きわどい」程度のもを幾つか拾ってみよう。

前をうしろになすよしもがな

逃げさまに腹当着たる小中間

「小中間」は徒歩で戦う身分の低い兵卒。「腹当」は身体の前だけを防ぐ簡便な鎧。「男色」を暗示する前句を転じて、突然の敵襲に慌てて逃げ出す中間の姿ととりなし、いっせ後ろから槍で突かれぬよう「腹当」を前後逆に着たらよかったのに、と揶揄した形。

夜中にもぞひちひちといふ

魚の子のかけひの水を伝ひ来て

前句の「ひちひち」は夜中の男女秘事の音を連想させるが、付句はそれを魚の子が水に跳ねる音に変えてしまった。竹の節と節の間を「よ」ということから、夜中↓節中↓竹の中↓寛ととった「言葉遊び」でもある。

ことわりもなく抱きつきにけり

思はずも転ぶさかひの中柱

「中柱」は「側柱」に対して室内にある柱。転んだ拍子に思わず手近な何かに縋り付くのは日常ありがちなことで、いささか淫らな場面を想像させる前句を、さらりと受け流したところに工夫がある。

この他にも一々挙げれば切りはないが、最後に、これらの作者が無学な大衆ばかりではなかったことを示す証として、故事を踏まえた作品を幾つか挙げておこう。

西八条の寺のいにしへ

蓮葉にのぼるや池のあまがへる

「西八条」は平清盛の邸宅のあった所。「池のあまがへる」は「池の尼」と「雨蛙」を掛け、「池の尼」は清盛の継母「池の禪尼」で、平治の乱後に源頼朝の命乞いをしてこれを助けた。蓮葉に上るとは仏になることで、蓮葉に乗っている雨蛙に掛けて、「池の尼」が善根を施した報いで仏になったのがこの寺の縁起（いにしへ）だ、と受けたもの。

曾我兄弟は仏にぞなる

蓮葉にかはづの子どもならびあて

も同工異曲で、曾我兄弟は河津祐泰の子だから、河津の子↓蛙の子と掛け、二人並んで蓮葉に乗って仏に成ったと見立てた。

高く落つれば息はずむらん

僧正の馬乗りたての嵯峨の原

「僧正」は「僧正遍昭」で、『古今和歌集』に「題しらず」として「名にめで

人のこのころのかはる世の中

- ①時過る身こそ六日のあやめぐさ
 ②あぶさかもはてはなこそその関路にて
 ③うき身さへいまはの時やをしからん

とあり、①は、前句の「世の中」を「男女の仲」ととって、「さだ過ぎて誰からも相手にされなくなった女」の嘆きを付けたもので、「六日のあやめ」は「十日の菊」とともに、「時期が過ぎて役に立たなくなったもの」を指す。②は、都から旅立って「逢坂の関」を越え、果ては「勿来の関」に至るといふ意に、「逢いたい」と思った仲もやがて「もう来るな」と思うようになってしまうと、「愛の無常」を諷したものの。③は、世を厭って出家しようとした身（憂き身）さえ、いよいよ（いまはの時）となるとさすがに惜しくなるだろう、と出家しようとする人の本音を皮肉ったものだという。

北村季吟の『新撰犬筑波集』に宗祇の「独吟百韻」からとして引かれているものでは、

堂はあまたの多田の山寺 といふに
 まんじゅうをほとけのまへにたむけおき
 たれみそすくふしゃくそんやある

がある。「多田」は河内源氏の一党多田満仲の本拠地で、その地名から「満仲↓まんじゅう」を引き出してそれを「お堂の仏前」に供えるとき、さらに饅頭に掛ける「垂れ味噌」を「掬う杓子」を、そして「杓子」から類似音で「釋尊」を引き出して、「釋尊が誰（垂れ）を救うのか」と、言葉の洒落を使って展開して行く巧みさはさすがである。

宗祇らの撰した『新撰菟玖波集』に四年遅れて『竹馬狂吟集』（明応八年・一四九九年）が世に出た。これは、「竹馬」が「菟玖波」をもじり、「狂吟」は「俳諧」を意味するから、前者を強く意識して「俳諧」を連歌に対抗する独自の存在として主張したものであろう。「正体歌」と「誹諧歌」の関係に模して言えば、俳諧を連歌の「付録」の地位から解放し独立させようとした、と言えるかも知れない。撰者は不明で句の作者名も記されていない。風俗や用語の違いで難解な句もあり、この種の作品の常として猥雑なものも少なくないが、分かり易いものを幾つか拾ってみよう。（引用は「新潮日本古典集成」『竹馬狂吟集 新撰犬筑波集』による。）

足なくて雲の走るはあやしきに

何をふまへてかすみたつらん
 「雲が走る」という成語に「霞立つ」の成語で応えたもので、「なぞ」付けの一種。

なにとてかたて湯のからくなかるらん

むめ水とてもすくもあらばや
 「蓼湯」と「立て湯」（沸かした湯）を掛けたのに対して、「梅水」と「むめ（埋め）水」を掛け、「辛くない」に「酸くない」と応じたものである。

鳥をむしればはだかにぞなる

衣をばなどきじきと申すらむ
 羽毛をむしられて裸になってしまった「雉」が、それでも衣を「着じ、着じ」（着ない着ない）と頑張っているという趣向で、これも「なぞ」付けの一つの型。

上は濡れたり中は水なり

鞘巻きの名を抜きみれば波の平
 「鞘巻」は腰刀の一種。元は鞘に葛や藤の蔓を巻き付けたが、後はその形に刻み目をつけて漆を塗った。「波の平」は刀工の名。「濡れたり」を「塗れたり」に見立て、「水」に「波」を対応させた。これも「なぞ」付けである。

「なぞ」には「…もあり、…もあり」の形も多く、前句付けの「定型」と言ってもよい。

つぶるるもありつぶれぬもあり

秋風に木ずゑの熟柿また落ちて
 は、説明の必要もないだろう。

めでたくもありあやふくもあり

智入りの夕に渡るひとつ橋

「ひとつ橋」は「一本橋」。めでたい智入りだけでも、丸太一本を渡しただけの危ない橋を夕方に渡らねばならないとは…、という次第。智入りの時刻は七つ時から暮六つの間が普通。夕方の四時から六時頃だから、季節によってもう足元が暗くなっていた。

吹くも吹かれずするもすられず

割れ笛のさらばさらさら成りもせで

日本文学のなかの「ことば遊び」(四)

倉 西 博 之

九

本稿では初期の「俳諧」について、そこで用いられた「ことば遊び」を中心に、述べてみることにしたい。

文芸用語として「俳諧」が用いられた最古の例は、『古今和歌集 卷第十九 雑体』の「俳諧哥」と思われるが、これをどう読んだかは必ずしも明確ではない。例えば岩波書店刊「日本古典文学大系」の『古今和歌集』(昭和三十三年)では「はい、はい、か」と読んでいるのに対して、同じ岩波書店の「新日本古典文学大系」『古今和歌集』(平成二年)では、これを「ひかい、か」と読んでいる。「俳」の音は「ヒ」であるから後者が正しいと一応は考えられるが、室町期には「俳諧」と書いて「はいかい」と読ませるのが普通であった(例えば、宗祇の『吾妻問答』)し、江戸期でも例えば『俳諧柳多留』であった。『古今和歌集』の当時どう読まれていたか、浅学の筆者にはどちらとも判断しかねるところである。

「俳諧」の語義についても幾つか説がある。「新日本古典文学大系」の注によれば「俳」は「悪い」、「諧」は「調べ」の意で、「正体の歌に対して欠点のある歌の意か」とし、また、「俳」は「そしる、悪口をいう」、「諧」は「やわらぐ、戯れる」の意でもあるから、「おどけたり、悪口をいう、ふざける」の意か、とも記している。おそらくは、歌が「文芸」として形を整えて行く過程で振るい落とされた「遊び歌」が、こういう形で居場所を与えられた、言わば「付録」のような扱いだったのではあるまいか。

日本文学のなかの「ことば遊び」(四)

この種の「遊び歌」は『万葉集』にも随所に見られるが、中でも卷第十六の「由縁ある雑歌」と題された歌群が、そしてそこに含まれる約四十首の「嗤笑歌」が、特に注目される。『万葉集』では卷十七、二十が大伴家持の私的歌集とも見られることから、卷十六を卷一、十五の「正体の歌」に対する「付録」の位置にあるとする見方もあり、『古今和歌集』卷第十九「雑体」の六十八首に、卷第二十の「大歌所御歌」以下三十二首を合わせて「付録」と見れば、そこに撰集上の一貫性が認められるかも知れない。

連歌が和歌に代わる新しい文芸として確立されるにつれて、それが元来持っていた卑俗で身近な「遊び」の要素が排除されて行ったことは、前稿の末尾でも触れておいた(『金蘭短期大学研究誌第三十三号』参照)。二条良基らの撰した『菟玖波集』は、これを『古今和歌集』に匹敵するものにしたという撰者の意向によって準勅撰の勅許を得たが、その中で、連歌の分類として初めて「俳諧」の語が用いられたのも、『古今和歌集』の「俳諧歌」に倣ったものであろうか。「純正連歌」に対する「俳諧連歌」の呼称はこうして生まれ、後に略して単に「俳諧」とも呼ばれるようになった。

けれども、宗祇を中心に編まれた『新撰菟玖波集』では、「俳諧」の分類は姿を消している。とはいっても、この頃もなお俳諧は盛んに行われ、宗祇やその弟子たちも時には俳諧で遊んだことが知られていて、その作品も少数ながら残されているのである。

新潮社『竹馬狂吟集 新撰犬筑波集』(「新潮日本古典集成」)の「解説」(井口壽)によってその幾つかを拾ってみよう。

宗祇の句集『萱草』に「俳諧体連歌二一句百句付侍しに」という題で、